

細く強い、黒染めの糸を指に絡めて弄ぶ。

私の大事な宝物。この黒い糸は私の誇り。

大切に続けたこの糸は、私が誇れるものの一つだった。

これだけは誰にも負けない。例え他の何かが劣っていたとしても、これだけは負けない自信があった。

ぬばたまのこの黒糸。

誰にも負けない私だけのもの。

初めの人と会っても、私はそれだけで超然といられた。

磨きあげ、整え、飾っていく。

みんなが誉め称え、羨望の眼差しを向ける。

精緻な装飾は人に自信を与えてくれるのだ。

だから私はどこに行っても、人間関係で苦痛を覚えなかった。

自分に自信があるわけじゃ決していない。この美しい装飾が私を護る盾だった。

どんなに非力でも、全ての輕蔑を弾く仮面があれば、人は容易く傲慢になれる。

私もまたその典型なのだろう。でもだからって驕つたりなんかしない。

仮面を磨きあげ万全とする私に抜かりなんかあるはずがなかった。

だというのに私の仮面は消えてしまった。

忽然と消え失せたわけではない。誰かに奪われたわけでもなく、じわじわと私の前から消え去っていったのだ。

その光景は地獄でしかなかった。自分の装飾が少しずつ自分の前から消えていく。

私は少しずつ戦場の只中で護るものを失くしていくのだ。

戦術など持つはずがない。私は自分を護り抜くことだけを考えていた。

そんな人間が武器を携える理由なんてない。

だから私は戦場から逃げ出した。仮面を失くして
生き残れるほど、私は強くないのだから。

私を生かしてしてくれた装飾。それを引き剥がし
たのは、他ならぬ私自身の中から膿み出されたもの
だった。

それが悔しくてならない。愚かにも私は私によっ
て生き抜く術を失くしたのだ。

人は装飾を被るもの。個を曝け出すことは罪でし
かない。

汝、偽らざるを罪と知れ——己が醜さを仮面の
下に隠し、装飾を彩り給え

七月——私はいつも通り、病室で日常を送っていた。

ベッドの上で窓の外を見つめながら、ただ漫然と日々を過ごす。長年運動をしていないため、筋肉さへ削ぎ落とされた細い腕からは点滴が伸び、私は間違ひなく病人だった。

今は梅雨だというのに、今日は晴天で暑くて仕方ない。こうなると病人の服というのは薄くて過ぎやすい。窓から滑り込んだ風が、服の中に入り込み素肌を撫でて去っていく。

それがとても心地よい。何一つ飾りをつけていな

い私の体に、夏のそよ風はとても気持ちがいいものだ。

誰もいない個室の病室で、私は専属医と数名の看護師としか会わない日々を過ごしている。それ以外の人はここ最近会った覚えがない。

専属医曰く、今日は顔色もよく比較的体調がいいので、院内を散歩しても構わない、と言っていたがどうしようか。

この時期にしては珍しく天気がよく、気分もいいので少しくらい散歩に出るのも楽しいかもしれない。今まではどんなに体調がよくても、病室で本を読んでいたのだが、買ひ溜めしたものはもう全て読んでしまった。さらに悲しいことにいつも本を買ってきてくれるはずの奴は、本日お見舞いには来てくれない。

そうなってしまふと暇だ。そもそも入院生活ですることなど限られている。読書やお見舞いの人達と

の談話だんわでしか暇を潰せない私のような患者は、そうそう新しくやることなど見つからないのだ。

看護師の一人である戸田とださんも気晴らしの散歩とすすか勧めてたしなあ……。

「うーん……」

あまり気は進まないけど、今のうちに慣れておくべきかもしれない。どうせ院内だけの付き合いだ。

多少の歪ゆがみは致し方のないこと。

それに大抵たいていの人はごく普通にここを去っていく。

私と同じ年代の人と死別しべつすることなんて滅多めったにない。

だからこそ、記憶にも残りにくいだろう。死の病やまひにかかっていたなら一瞬一瞬が大切だろうが、普通はそんなはずない。

入院生活中に喋った人をいちいち覚えてる人なんかないはずだ。それは私にとって好都合こうごうごうといえる。

本当は誰かと会うのも嫌なんだけど、まあ、今は暇を潰すことが先決だ。

こんな退屈な場所で読書もできなかつたら、私は溶とけてしまう。

「しようがないよねえ」

外界がいがいよりは少し軽蔑ケイバが少ないだろうしね。

戦場せんじょうっていうよりは天国に近すぎるし、楽園と呼ぶには死が多すぎる。

逆にこういう場所こそ、装飾ベルソナを薄くさせるのかもしれない。

ベッドから出た私はスリッパを足に引っ掛けて、よたよたとおぼつかない足取りで車椅子に座った。

長年ベッドの上で他者とは極力ききりよく接しなかった私の心身は、歩き方も人間関係の築き方も忘れつつあるのかもしれない。

少なくとも、車椅子なしでの移動はほとんどできない。こうやって少しの距離なら大丈夫だけど、部屋と部屋の間を移動するだけで足は簡単に音を上げ、呼吸そそは乱みだれてしまう。

なんとも脆弱に劣化してしまつたものだ。私の心の全盛期とは比べ物にもならないじゃないか。全く、過去の私と現在の私は似ても似つかない。

基本ステータスがあまりにも低下してしまつている。

しかしそれも自身を護るための装飾だ。

人よりも遥かに劣り、誰かの助けなしではまともに生きることもできない。さらに背景設定もばつちり出来上がつている。

それが今の私の仮面だ。あの頃の仮面と比べれば頼りないが、その頼りなさがまたこの装飾に力を与えてくれる。

これなら院内での生活はそこそこの問題ない。

同情の対象なら蔑みを受けることはほとんどないはずだ。例えそんな人がいたとしても、偽善者諸君が私を擁護してくれる。

昔と比べて卑怯で姑息で狡猾なのかもしれないけど、それでも何も飾りが無いよりはマシだろう。

虚飾だとしても、意味は十分にある。人間が本性を現せば、人間によつて築かれる社会なんてあつという間に瓦解するからね。

かなり極まってきたドライビングテクで車椅子を扉の前まで運び、よつこらせとスライド式の扉を開ける。この扉さえ重く感じるあたり、私の腕は本當に使い物にならない。

病室を出ると、窓から射し込む陽光が私の眼を焼いた。

「眩しいなあ……」

九十度車椅子を回転させ、太陽の光を直視しないようにする。あまり浴びすぎると、モヤシな私はダメになりそうなので、人工の光があるところへ移動するとしよう。

まだ真新しい白い廊下をすいすいと進んでいく。悠々自適に暮らしてるなんてわけじゃない。これは病院という融通の違う場所で生き抜くために身につ

けた装飾だ。

素体だけで人は生きていけない。必ずその場に合わせた装飾を身につけなければ、そこに適合することなどできるはずがないのだ。

車椅子を移動させて開けた空間に出る。いくつかの長椅子が置かれた待合室で、患者さん方が疎らに座っていた。

見るからに死相が出てる感じの中年のおっさんに、新聞を熱心に読んでる殺しても死ななそうなお体、ちよつと太りすぎな洋梨体型のおばさん、あとはバンドでもやつてそうな脱色無造作ヘアという髪に優しさが微塵もないかっこいい系の兄ちゃん。

そんな感じの方々がパジャマ姿でのろのろと時間を持て余していた。

全く……なんていうかみんないい感じに装飾つてるとるじゃん。十分すぎるほどに素体を隠している。

どっからどう見ても、外からやって来た普通の患

者様だ。みんな汎用型なんだね、やつぱり。私はアインデンティティともいえる装飾だった仮面を失ってしまった。

一番必要なものを失ってしまった私から、汎用性は欠如している。

神経研ぎ澄ませて血眼にならなければ、その空間に適應することができない。全く不便な自分だと思

う。

それほどの努力をしてでも素体は隠さなければならぬもの。少なくとも私はそう思っている。

景色の一つとして何ら違和感のない患者達。その群れから外れた、なんか馴染めていない人影に私は気付く。

自販機の前で、その人は呻吟していた。悩ましげに眉を寄せ、自販機に並ぶ飲み物を上から下まで何度も見ている。

そんなことをしているのに、その人は見るからに

怪我人だった。頭に包帯を巻き、左腕にはギブスがつけられ、首にかけた包帯にぶら下げられている。右目には眼帯がされ、体のあちこちに包帯や湿布が見られた。

一体何がしたらここまで傷だらけになれるのか。その辺を小一時間ぐらい問い詰めたくなるような外見だ。

だというのに、その人の眼はあからさまに生きていた。なのになのに顔にはなんか覇気がなくて、軽くだらけきっている。ブーの素質は十分にあると思う。

今時の若者に見られがちな無力系脱力感のある雰囲気ベルソフを放っているが、それは装飾ベルソフにしては身に染みすぎている。

きつと素体フシムとよつほど相性がいいんだろう。その点では、その人によく似合っているのかもしれない。その日の私は本当にいつもとは違う気紛れきまぐれで動い

ていて、病室から外に出ることだって希少な私は、その日入院してから初めて自分の意思で他人に近づいた。

車輪を回し、自販機の前まで行きその人の背後に止まる。細い背中をちよつとだけ見つめ、勇氣や躊躇ちよちよもなしに私は自然と言葉を投げていた。

「何をしてるんですか？」

私の問いにその人は首だけで振り返る。不機嫌そうな顔をしているけど、顔立ちは結構可愛い方だ。

女の子なのにこんな傷だらけになって可哀想かわいそうだな。なんていうかすぐくもつたいたい。

でも装飾ベルソフとしてはいいかもしれないかな。整った顔かほに華奢きゃしゃな体、そこに包帯っていうのは確かにそれぞれがある。

そういう趣味の人間がいることを知っている程度には、私も純情じゅんじやうじゃありません。かつこ、涙、かつこ閉じ。

その点では羨ましい。

「何？ それ、俺に言ってるの？」

「ん、俺？」

声は女のそれなのに、今この子は自分のことを俺と言ったの？

いや、僕少女なんていうのがあって知ってるが、それは需要が低すぎはしないだろうか。確かに一部の熱狂的地域なら頼もしいものになるかもしれないけど、ここでは適合できやしない。

折角素体はいいのに、そんなじゃさらにもったいないと思う。

呆けている私を怪訝そうに睨んで、その人はぼりぼりと頭をかいた。

「おーい、聞いてるか？」

「ん……あ、ああ、ごめんなさい。ちよつとびつくりしちゃって。まるで男の子みたいなの口ぶりだったから——」

私の言葉にその子は顔をむすつと顰める。さつきから思うけど、この子には愛想がない。

全くいつもそんな不機嫌そうな顔をしていると、人間関係上手くないぞ？

その人は呆れ切ったようにため息を吐き出し、私をじとつと見据える。

う、結構怖いな。

「俺、男なんだけど」

「はひっ？」

一瞬、幻聴を聞いた気がした。この子は自分が女じゃないと言ってるのでしょうか？

分かった。これは高度な暗号だな。

私を舐めてもらっちゃ困る。それでもミステリ小説は結構読んでるぞ。やっぱり最近の若者が読むべきミステリーは講談社ノベルズだよねえ、とかつて知ったかぶれる程度には！ 西尾維新しか読んでことないけど。

確かに胸は私に負けず劣らずつるべったんだけど、そんなわけはないだろう。私より全然可愛いっていうのに。

これで男ってのは詐欺だ。何かを奪われたわけじゃないけど、なんだか詐欺な気がする。

なんだか悔しい。全女性に対する嫌味でもあるかもしれないぞ、これは。

「男なの？」

「だからそう言ってるんだろ？ 全く、どいつもこいつも」

「どうやら、この子はいつも性別を間違われるらしい。そりゃそうだ。こんなのが男だったら、性別の境目があからさまに分からなくなる。」

嫌がらせのような悩みを持つてるじゃないか。

「可愛い顔してるもん、そりゃ間違えるよ。それで、何をしてたの？」

私の言葉に納得いかないような表情をしながらも、

彼は困り顔でジュースの並ぶ自販機を顧みた。

「いやな、ちよつとジュース買ってきてくれて頼まれたんだよ」

「へえ……あなた怪我人よね？ 同室の友達にでも頼まれたの？」

「いや、見舞いに来た人」

……どんだけ。

最近の若者はマナーがなくなっていうけど、その典型なのだろうか。それにしても、こんな可愛い子をバシリに使うとは許せない話だ。

「でも、それなら早く買っていつちゃえば？」

「……ミルク味のレモンジュースを買ってきてくれて頼まれた場合、お前ならどうする？」

救いを求めるような彼の目。

「……どうもこうも、そもそもそんな拒否るわよ」
絶対に買ってこれるはずがない。私達は一休さんじゃないんだから、それに打ち勝つ方法なんか皆無

だ。

「じゃあ、もし拒否ったり、違うの買つてきた場合に暴力振るわれるような人だったらどうする？」

「……友達は考えて作りなさい」

救いの道がないので、とりあえずそれだけ忠告してみた。最もそれはもう手遅れかもしれないけど。

とりあえず、なんだろう。こういう場合に使う言葉がなんかあったはず。

あ、そうそう。ご愁傷様だ。

「俺だって好きであんなのと知り合いになつたわけじゃねえよ！ いや、出会いたくもなかった！」

「はいはい、院内では静かにね」

まあ、なかなか凄まじい様子だから荒れたい気持ちも分かるけど、これはさすがに患者さん方に迷惑だ。この子が煙たがられても私は一向に構わないけど、一括りにされてしまったら手に入れた仮面に傷がつく。

それだけはおめんだ。

しかしこの子、なかなか楽しいな。話してて楽しめるし、なんだか飽きない。

久しぶりだな、人との関係に疲れないのは。いつも神経使わないといけないのに、どうしてだろうか、この子との会話は普通に愉快だと思えてしまえる。

「なあ、なんか助かる術はあると思うか、あんた？」

「うーん、そこに助かる術がそもそも用意されているかが疑問だな、私は」

「やっぱりそう思うよなあ。絶対これ、俺に暴力振るための口実だよなあ」

随分サディスティックな人らしい。

かなり暴力的っぽいいし、こうやって口実を用意するのもまた酷い。

苦労性だなあ、こいつ。将来、人間関係で苦労しそうだ。

「それじゃ、何買うの？」

「……何買っても殺されるしな。とりあえず金もつた
たいないから、何も買わずにしばらくあっちこっち
歩き回ろうかな」

トラウマがあるらしくて、なんか顔色が悪い。よ
っぽど酷い目にあっているみたいだ。

「じゃあ、私も一緒にいいかな？ 私も暇なんだ
よね」

「……別にいいけどよ。全然楽しくないぞ？」

「いいよ。あなたといると飽きないし」

私の言葉に彼は顔を掬めた。む、今度は何がいけ
なかつたんだろ。

なんていうか単純そうに見えて、意外と気難しい
な。

「俺は見世物じゃないんだけどな」

「あ……ああ、ごめんなさい」

ぶっちゃけ見世物だと思ってますとも。

だって、なかなか見てて楽しめるじゃん。これは

いい見世物だと胸を膨らませていたよ。

「まあ、いいじゃない。ねえ、中庭の方にいかな
い？ 私、外行きたいな」

「ん、ああ、別に構わないけどよ」

相変わらず不承不承ふしょうふしょうって感じだけど、なんとなく
分かった。この人はなんだかんだお人好しだ。不機
嫌ふけんそうな顔は彼なりの仮面たてらしい。

私のように他者との関係を有利に築くための仮面
ではなく、他人と極力深く関わらないための。お人
好しな自分自身が背負せおうモノを少なくするためのも
のなんだろう。

それでもこの人は結局お人好しでどうやっても他
人を助けちゃうんだね、きつと。

装飾ベルンナを見れば、その人の内面なんて大体分析でき
る。こんなのは簡単だ。

少なくとも——ただの会話にさえ神経を研ぎ澄ま
せる私には、ね。